

<巻頭言>

先端的課題に応える流域圏学会

那須清吾*

*流域圏学会会長, 高知工科大学副学長

現代は社会や自然が様々に、緩く激しく変化しているを感じる時代です。気候変動は過去の温室効果ガスの排出の結果であり、時として閾値を超えると激しく自然を変えるようです。IoTやAIは社会や生活を劇的に変える可能性を秘めていましたが、新型コロナウイルスにより加速され、後戻りできない社会が出現すると考えます。防災面では、平成27年1月20日に国土交通省が発表した「新たなステージに対応した防災・減災のあり方」においては、想定最大外力に対応するための地方自治体の役割と責任がより重くなり、防災対応の前提となる災害想定も大きく変化しました。

流域圏学会の会員の皆様が日々取り組まれている流域圏、関連する地域、分野においても、研究者としての取り組み方法に変化があると考えます。河川防災では将来、IoTが地域情報の取得に変革をもたらす可能性もあり、既にAIによる水文モデル作成も可能となっています。全てが大きく変化する中で、将来の望ましい社会や流域圏、防災、研究の在り方を追求する絶好の機会であり、これらには無限の組み合わせや可能性があると考えます。

本学会の役割は、この様な状況の中で高まってきていると考えます。実務家と研究者が協働しないと、この様な無限の組み合わせから最適なソリューションを創造することは不可能です。それぞれの立場や価値観、視点を今こそ結集していくべきと考えます。年に一回の研究大会で研究成果を共有するとともに、この様な状況下における望ましい社会や流域圏、防災、研究の在り方を今一度活発に議論するべきと考えます。また、学会において互いの研究成果を常時共有するような仕組みにも取り組みたいと考えます。最新の課題の状況把握から、最先端の研究成果の共有まで、様々な情報共有システムも構築するべきと考えます。

益々重要となる本学会の役割を果たし、次世代の研究者の活躍を支援するためのプラットフォームとしての役割を増進する時が来たと考えます。何よりも、この様な活動が促進される会員のメリットも十分に提供できる体制に取り組んで参りたいと考えます。